

令和元年5月30日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01124

研究課題名(和文)パラオ熱帯生物研究所に関する科学史研究

研究課題名(英文)A Historical Study of Palao Tropical Biological Station (1934--1943)

研究代表者

坂野 徹 (Sakano, Toru)

日本大学・経済学部・教授

研究者番号：70409142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終成果は、『島』の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』(勁草書房、2019年)として、6月末に公刊される。そこでは、1914年から1945年までの日本の南洋研究の展開を、パラオ熱帯生物研究所(1934-1943年)の活動を中心にたどった。本研究の特徴は、学問分野の枠を越えて、現地での調査研究を、研究者と現地住民、現地施政機関(南洋庁)、現地の国策企業などの交錯から描き出したことにある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、学会や公開シンポジウムで適宜報告するだけでなく、研究代表者が編者となった論文集(『帝国日本の科学思想史』勁草書房、2018年)や単著(『島』の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』(勁草書房、2019年)などとして発表した。科学史関係者のみならず、歴史学、生物学、人類学、植民地史研究者などの他の専門領域の研究者、さらに一般の読書人にもその成果を公開したことが本研究のひとつの社会的意義である。

研究成果の概要(英文)：The final results of the research will be published at the end of June as 'Scientists in Island: Palao Tropical Biological Station and Southern Ocean Studies in Imperial Japan' (Keiso Shobo (publisher), 2019). It traced the development of Japanese studies on the South Sea from 1914 to 1945. The main feature of this research is that it goes beyond academic fields and depicts the interplay between researchers and local residents, local governing institutions (Nanyo-cho), and local government-owned enterprises.

研究分野：科学史

キーワード：パラオ熱帯生物研究所 海洋生物学 人類学 民族学 ミクロネシア フィールドワーク 科学史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦前、日本の研究者がアジア各地の植民地で実施した調査研究に関する歴史研究は、1990年代から本格的に始まり、00年代以降、台湾や韓国などにおいても、日本統治時代の学術活動の歴史を問い直すとする研究が盛んになっている。こうした「植民地科学史」研究の進展によって、植民地統治時代の台湾、朝鮮、中国(旧満州)などで行われていた学術活動の歴史について多くの成果が既に蓄積されている。応募者も、こうした研究状況に倅さし、これまで国内外の研究者と情報交換しながら、日本の自然人類学者、文化人類学者(民族学者)、民俗学者、考古学者がかつて植民地で行った調査研究活動についての研究を続け、その成果は『帝国日本と人類学者』(2005)などに発表している。さらに、近年は、戦後を含めて、日本の様々な学問領域の研究者が国内外で実施したフィールドワークに注目した研究を進めており、その成果は『フィールドワークの戦後史』(2012)などで発表した。

しかしながら、1914年から45年まで日本の植民地統治下に置かれ、戦前、南洋群島と呼ばれたミクロネシアの島々(現在のマリアナ諸島、パラオ、ミクロネシア、マーシャル諸島)で日本の研究者が実施した学術活動に関する検討は、ほとんど行われてこなかった。

本研究の主題であるパラオ熱帯生物研究所は、1934年、日本学術振興会による最初の研究機関として、当時、南洋群島の施政機関(南洋庁)が置かれたパラオ・コロール島に設置された。共同利用研究機関の嚆矢(廣重徹『科学の社会史』1973)とも評されるパラオ研では、日本各地の大学から派遣された若手研究者が現地にて一定期間滞在する体制のもと、サンゴ礁を中心に熱帯生物に関する幅広い調査研究が行われた。太平洋戦争勃発による閉鎖(1943年)まで、小規模の研究機関ながら、パラオ研で行われた研究の水準は当時、世界的にもトップクラスのものであり、戦後日本におけるサンゴ礁・熱帯生物研究の原点となった、学術的に非常に高い価値をもつ機関である。

にもかかわらず、廣重徹による先駆的指摘以降、1990年代に、パラオ研を若き生物学者たちの「ユートピア」「理想の城」という観点から論じた荒俣宏の研究(『大東亜科学綺譚』1991)と、研究所設立の学術的背景と研究活動を主に制度史的観点から検討した応募者自身による研究(「パラオ熱帯生物研究所 その誕生から終焉まで」『化学史研究』22巻3号、1995)の二つが発表されただけで、それ以降、科学史的な観点からの研究は全く行われていない状態が続いていた。

2. 研究の目的

1934年、日本学術振興会によって、当時、日本の植民地(国際連盟委任統治地域)であったミクロネシア(南洋群島)のパラオ・コロール島に設立されたパラオ熱帯生物研究所は、小規模ながら、世界的にもトップクラスの研究水準を有するサンゴ礁・熱帯生物に関する研究機関であった。本研究は、太平洋戦争勃発により研究所が閉鎖される1943年までの時期に、パラオ熱帯生物研究所に所属した若き研究者たちの様々な活動を、「植民地科学史」および「フィールドワーク史」の観点から検討しようとするものである。

3. 研究の方法

主として、文献(資料)調査・現地調査・関係者のインタビューの3つの方法を用いて、パラオ熱帯生物研究所の活動を明らかにした。以下、個別に具体的方法とその成果を述べる。

(1)文献(資料)調査: パラオ熱帯生物研究所が発行した紀要(和文誌、欧文誌)、各研究員の著作・論文、同窓会誌(『岩山会会報』)、研究所日誌、各研究員の遺した各種資料(写真、フィールドノートなど)が主要な調査対象となる。については、国立国会図書館および全国の大学図書館などで、相互貸借および出張によって資料を集めた。は、長年行方不明となっていたが、2017年に元研究員の故・元田茂氏の自宅に所蔵されていることが判明し、2018年、東北大学史料館に寄贈・公開されるのを待って、資料を閲覧した。については、研究員が戦後関係した諸機関(阿部記念館、横須賀市自然・人文博物館、瀬戸臨海実験所、阿嘉島臨海研究所、原野農芸博物館)への出張調査と、研究員の遺族・関係者からの資料提供を受けた。

(2)現地調査: かつてパラオ研が置かれたパラオ・コロール島(現パラオ共和国)およびミクロネシアのヤップ島、サイパン島で現地調査を実施した。

(3)関係者のインタビュー: 元研究員のご遺族・門下生およびパラオ研の雇い人(沖縄県出身者)のご遺族などからインタビューを実施した。

4. 研究成果

以上の方法を用いて集めた各種情報の分析にもとづき、その最終的成果として、『島 科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』(勁草書房刊)を2019年6月に刊行する。これは、パラオ研の活動を中心に、戦前日本のミクロネシア調査の全体像を明らかにしようとするものである。詳細は本書にあたってほしいが、以下、参考のため、本書の目次を掲げることとする。

プロローグ 島 にわたった科学者たち(帝国日本の南洋研究/ 島 というフィールド
本書の分析視角/ 南洋貿易と南洋興発/ 「島民」と公学校/ 民間航路の開設/ 本書の構成)

第1章 占領と視察 第一次世界大戦と南洋研究の起源

- 1 日本統治以前（交替する支配者／ドイツ時代の学術調査）
- 2 海軍御用船に乗って（南進論と南洋調査／占領と視察／横須賀軍港から 島 へ）
- 3 視察日誌より（物理学者／人類学者／経済地理学者）
- 4 人類学者がみたミクロネシア人（「占有」と人類学／カナカ 怠惰と性的放縦）
- 5 植民地としてのミクロネシア（現地開発の可能性／移民か「土人」の活用か）

第2章 南洋庁と現地調査（一） 民族誌と自然人類学

- 1 委任統治と南洋庁（委任統治制度と南洋庁の設立／国際連盟からの脱退と南洋群島）
- 2 松岡静雄と『ミクロネシア民族誌』（旧慣調査の開始／南洋庁と『ミクロネシア民族誌』／松岡静雄のミクロネシア人観／日本人と「南方人」／委任統治から「南方開発」へ）
- 3 長谷部言人の生体計測プロジェクト（長谷部言人と南洋研究／ミクロネシア再訪／「南洋群島の人種関係」／「日本人と南洋人」／なぜ「信じたい」のか）

第3章 南洋庁と現地調査（二） ヤップ島の人口減少をめぐる

- 1 人口減少問題と南洋庁の医学者たち（委任統治と人口減少問題／医院の整備と「地方病調査研究」／「島民」健康調査／性病一斉検査／人口減少と「島民」のセクシュアリティ）
- 2 矢内原忠雄のミクロネシア調査（植民政学と南洋研究／「南洋群島旅行日記」／「ヤップ島旅行日記」／矢内原と 島 の植民地近代／『南洋群島の研究』と人口減少問題／「文明の神聖なる使命」としての委任統治）

第4章 「文明」から遠く離れて 土方久功と「裸の土人たち」

- 1 「土人」たちの世界 ミクロネシアへ（芸術と民族学のあいだ／山城丸に乗って）
- 2 パラオにて（コロール到着／調査開始／「めりこむ」／モデクゲイ）
- 3 「文化の果て」 サタウル島での七年（サタウルへ／タブーの網の目／「文明」と「未開」）
- 4 変貌するコロール 土方とパラオの植民地近代（七年ぶりのコロール／「ガルミツ行き」／南洋群島開発調査委員会と開発十箇年計画／「神様事件」 モデクゲイ再び／東京にて／島民慣習調査／南洋庁と土方久功）

第5章 サンゴ礁の浜辺で パラオ熱帯生物研究所の来歴

- 1 畑井新喜司とパラオ熱帯生物研究所の誕生（太平洋学術会議とサンゴ礁研究／畑井新喜司と前研究所時代／日本学術振興会第一小委員会）
- 2 パラオ熱帯生物研究所の研究体制（研究員と研究所／研究施設／紀要・同窓会誌・日誌）
- 3 サンゴと熱帯生物 研究の推移（時期区分／「草創期」／「前期」／「後期」・「終焉期」）
- 4 コロールの生活（宿舎とコロールの街／アラバケツ集落／酒と女性・スポーツ・調査旅行／南洋庁・水産試験場の人びと／雇い人たち）

第6章 緑の楽園あるいは牢獄 パラオ熱帯生物研究所の研究生活

- 1 緑の楽園あるいは牢獄（パラオは研究者の楽園か／石川達三の「赤虫島日誌」）
- 2 パラオのファールブル 阿部襄（早すぎた動物行動学者／南洋生活事始め 阿部の場合／カヤンゲル環礁への旅／研究所とアラバケツの子どもたち）
- 3 海とチャモロ 元田茂（海とプランクトン／南洋生活事始め 元田の場合／ヤルート調査旅行と高橋定衛の死／パラオの奇人変人たち／チャモロ一家との交流／「研究所日誌」から）
- 4 光る生物を求めて 羽根田弥太（医学から発光生物学へ／南洋生活事始め 羽根田の場合／「島津さんの自由主義」／ボルネオ紀行）
- 5 「無期限」のパラオ行き 阿刀田研二（サカナからサンゴへ／南洋生活事始め 阿刀田の場合／畑井所長の名代として／逃避行 トラック・マーシャルの旅）

第7章 島 を往来する 南洋学術探検隊・田山利三郎・八幡一郎・杉浦健一

- 1 南洋学術探検隊（島 を往来する科学者たち／南洋学術探検隊と齋藤報恩会・ビショップ博物館／探検隊と南洋庁／仙台から南洋へ 調査と採集）
- 2 田山利三郎のサンゴ礁研究（田山利三郎とミクロネシア／東北帝大地質学古生物学教室と南洋庁熱帯産業研究所／マーシャル諸島の旅（一九三二年）／ニューギニア調査（一九四〇年））
- 3 八幡一郎の南洋考古学（八幡一郎とミクロネシア／「南の会」の民族学調査団／マリアナ北部離島の旅）
- 4 杉浦健一の応用人類学（杉浦健一とミクロネシア／ヤップ島調査（一九三八年）／「神様事件」とミクロネシア統治／民族統治 南洋群島から「大南洋」へ）

第8章 「来るべき日」のために 京都探検地理学会のボナベ調査

- 1 今西錦司とボナベ調査（今西錦司と京都探検地理学会／「来るべき日」 のために）
- 2 パラオ丸に乗って（船内講義／コロールにて）
- 3 訓練地としてのボナベ（ナナラウト山登山から「島民部落」へ／訓練地としてのボナベ／植

民地研究としての『ポナベ島』)

第9章 さらに南へ！ 戦時下のパラオ熱帯生物研究所とニューギニア資源調査

- 1 アジア・太平洋戦争とパラオ熱帯生物研究所（「科学南進」とパラオ研/南洋庁とパラオ研/土方久功とともに/ラジオ放送と開戦/南進計画の蹉跌と研究所の終焉）
- 2 田山利三郎と海軍ニューギニア資源調査隊（調査隊長・田山利三郎とニューギニア/調査隊の結成/パラオ経由ニューギニア行き/調査経過/帰還

第10章 パラオから遠く離れて パラオ研関係者のアジア・太平洋戦争

- 1 満洲へ・戦線へ（仙台から満洲へ/召集/時岡隆と七三一部隊）
- 2 南方軍政とパラオ研関係者たち（畑井新喜司とフィリピン占領/加藤源治とマカッサル研究所/羽根田弥太と昭南博物館/パラオ研関係者と南方科学ネットワーク/土方久功の戦争）
- 3 コロール炎上（パラオ大空襲と雇い人のその後/戦時下の「友人」たち）

第11章 島 が遺したもの 南洋研究と岩山会の戦後

- 1 南洋研究の戦後（その後の南洋研究者/『民事ハンドブック』と日本の南洋研究/パラオ研の遺産と戦後アメリカ）
- 2 岩山会と戦後日本（パラオ研の記念写真から/林一正と元田茂/山内年彦/阿部襄/羽根田弥太と島津久健/岩山会とパラオへの郷愁/島津久健とカタリーナのその後）

エピローグ 科学者が歴史を記録するということ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計8件)

- (1)「生物学者と戦争 パラオ熱帯生物研究所(元) 研究員・羽根田弥太と昭南博物館」日本科学史学会(2018年5月26日、東京理科大葛飾キャンパス)
- (2)「緑の牢獄あるいはユートピア パラオ熱帯生物研究所の若き学徒たち」生物学史研究会(日本科学史学会生物学史分科会)(2018年3月24日、東京大学駒場キャンパス)
- (3)「占領と視察 『南洋新占領地視察報告』とは何か」神奈川大学日本常民文化研究所公開研究会(2017年9月27日、神奈川大学日本常民文化研究所)
- (4)「南洋から東南アジアへ パラオ熱帯生物研究所から考える戦時下の調査研究」沖縄国際大学南島文化研究所セミナー(2017年2月6日、沖縄国際大学)
- (5)「島の研究者群像 パラオ熱帯生物研究所を取り巻く人びと」沖縄民俗学会例会(2016年11月26日、沖縄県立芸大)
- (6)「パラオ熱帯生物研究所の写真資料と沖縄」戦後沖縄研究コロキウム(2016年9月10日、沖縄県立博物館)
- (7)「パラオ熱帯生物研究所研究員の「南洋」経験」日本サンゴ礁学会(2015年11月27日、慶応義塾大学三田キャンパス)
- (8)Investigating 'the Islanders': On Fieldwork in Micronesia before World War II”(2015年7月8日、第14回東アジア科学史国際会議(2015年7月6日-10日))

〔図書〕(計2件)

- (1)坂野徹・塚原東吾編『帝国日本の科学思想史』(勁草書房、2018年)
- (2)坂野徹『島の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』(勁草書房、2019年)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。